

に自己免疫疾患が関与するか否かを検討した。症例を含めモヤモヤ病13症例の自己免疫抗体の検索では、抗DNA抗体陽性3例、23%、抗核抗体陽性2例、15%であり、normal control及び自己免疫類似疾患の陽性率より有意に高く、モヤモヤ病の成因として注目すべきと考える。

16. 脳腫瘍患者の髄液および血清免疫複合体の測定 (脳神経外科)

清水 隆・星 妙子・岡田 隆晴・
糟谷 英俊・高橋 研二・喜多村孝一

脳腫瘍患者の体液性免疫の関与を検索するため、C1q solid-phase enzyme immunoassayにより脳腫瘍患者(47例、astrocytoma 12例、glioblastoma multiforme, germinoma 各6例、medulloblastoma, pituitary adenoma, craniopharyngioma 各4例、その他10例)における血清および髄液中免疫複合体を測定し、次のことが示唆された。

- 1) 脳腫瘍患者において髄液中免疫複合体の値が高値を示す場合、腫瘍細胞の髄腔内播種の可能性が高い。
- 2) 血清中免疫複合体が髄液中免疫複合体より高値を示す脳腫瘍の場合、液性免疫が髄腔内において局所的に関与していることを示唆する。
- 3) 脳腫瘍患者において髄液中免疫複合体の経時的測定は病態把握の上で有効と思われる。

17. 外科栄養と非特異的細胞性免疫能 (第二外科)

滝口 進・城谷 典保・馬淵 原吾・
倉光 秀麿・織畑 秀夫

我々は、外科栄養と悪性腫瘍患者の非特異的細胞性免疫能について、臨床を中心に検討をおこない、以下の知見を得た。

- (1) 癌のStageが高くなるほど栄養状態は一般に低下をみる。(2) 栄養状態と細胞性免疫能はおおむね相関する。(3) 低栄養状態で免疫賦活を行なうと、NK系はある程度活性が保たれるのに対し、T cell系はかえって抑制を受ける傾向にある。(4) 栄養改善を行なうと免疫能も全般に改善を見る。(5) 栄養改善は、栄養状態に先がけて免疫能を改善させる。(6) 免疫能の改善には、一定量以上のカロリー投与が必要であると思われる。(7) 低栄養状態での低免疫能は、単にEnergyのStoreが低いためであろうと考えられる。

栄養状態が細胞性免疫能にある程度直接のかかわりをもつ以上、悪性腫瘍患者の術前術後の栄養管理や、免疫療法施行時の個々の症例の栄養状態に、十分な考

慮がなされるべきであると考える。

18. 胃癌患者における血清TPA値の検討一特にその臨床的意義と免疫学的作用について

(第二病院外科) 成高 義彦・大谷 洋一・
小川 健治・榊原 宣

近年、欧米を中心に臨床的検討がなされている新しい腫瘍マーカーであるTPA (Tissue polypeptide Antigen)について、胃癌患者80症例、良性疾患40症例、健常人102例を対象にその臨床的意義や免疫学的作用について検索をこころみ、また、既知の腫瘍マーカーCEA, IAPとの関連についても検討した。

胃癌においては、進行癌、切除不能癌、再発癌に高値を認めた。良性疾患、健常人との間に有意差を認め、進行程度を規定する病理学諸因子との相関を認め、CEA, IAPとの間に軽い正の相関を認め、免疫学諸指標の間とは負の相関を認めた。また、実験的に高TPA癌患者血清および標準TPA添加によるリンパ球幼若化反応抑制から、免疫抑制作用が示唆された。

19. 筋無力症状を呈した甲状腺機能亢進症の一卵性双生児例

(神経内科)

柴垣 泰郎・太田 宏平・小林 逸郎・
竹宮 敏子・丸山 勝一

症例は19歳の一卵性双生児の姉妹である。姉は14歳時、夕方に強い脱力感により発症し、内分泌学的検査にて甲状腺機能亢進を認めバセドウ病と診断。誘発筋電図にてWaxingのみであり、症状も軽いことよりThyrotoxic myopathyと診断。妹は6歳時に左眼瞼下垂で発症。12歳時には眼瞼下垂が増悪し、テンシロンテスト陽性、誘発筋電図Waningの所見等の結果より重症筋無力症と診断。その際甲状腺機能亢進を認め、バセドウ病と診断。

今回の我々の症例は、甲状腺機能亢進症を有する一卵性双生児が共に筋無力症状を呈し、妹においては重症筋無力症の合併を確診することができ、妹においても重症筋無力症の合併が疑われた。甲状腺機能亢進症及び重症筋無力症は、共にその発症に遺伝的素因等が関与し、共通の病態機序の存在も考えられ、今回の我々の症例もそれらを検討する上で示唆に富むものと思われる。

20. 円錐動脈幹異常顔貌症候群と免疫系

(心研小児科) 寺井 勝・高尾 篤良・
泉田 直己・安藤 正彦
(病院病理) 平山 章